

「もぎたての野菜」と「土のにおい」 笑顔がはじけ、会話がはずむ

『二・七の市』は、その名
「二」と「七」のつく日に中心市街地で開催



▲いにしへの『二・七の市』(柳町通り・田原町) ※写真は、大正時代のもといわれています。

されている朝市のこと。特別な施設はなく、夜明けごろから午前中にかけて、農家や商店の方たちが広場に集まり、露天に店を広げ、市を開きます。農作物を中心に、多いときは数十の店が並びます。

『二・七の市』の起源は、さかのぼること約500年前、遠く中世に始められた六斎市ろくさいしだといわれています。当時は、神領地かむらちのあった神戸村市場(現在の神戸町・神戸市場地区)で開かれていました。その後、15世紀に戸田宗光が田原城を築城したため、商業の中心が城下町(現在の田原町・中心市街地)に集まり、自然と市もそちらに移動したものとされています。戦乱により、たびたび中断されたものの、三宅家が田原藩を治めていた約200年前に復活し、今日まで続いています。昭和30年代前半までは、柳町通り(旧国道259号)沿いなどで開かれていましたが、自動車の普及など時代の流れに従って、安全な公共広場などに移り変わっていきました。

※1【六斎市】 仏教の思想に基づき月6回開かれる市のこと。室町時代に始まったといわれる

※2【神領地】 中世以降に神宮・神社に与えられた領地のこと

『市』のある風景



▲安田さん(左)と八木さん(右)。安田さんは20年以上も市に出店しているベテランだ

ほとんど形を変えずに、数百年を生き抜いてきた『二・七の市』。新鮮な農産物が手に入る産地直売所が増えてきた近年においても、関わる人、訪れる人が途絶えずに続いている秘密は何なのでしょう。

「もうけは求めていません。野菜を育てて、仲間やお客さんに会いに来て、喜ぶ顔を見ることが生きがいになっています」

市で野菜を売っている安田さん(谷熊町)と八木さん(浦町)は、そう口をそろえます。「うちのおばあさんも、柳町でやっていた時分にお店を出していた。だから『二・七の市』は、昔からとても身近な存在なのです」

人から人へ、年代を超えて、気持ちが伝えられてきたから、多くの人が集まるのでしょう。常連のお客さんが、『二・七の市』の魅力をこう表現してくれました。

「市場では、物を買うというより、気持ちを買うという感覚ですね」